



装備製作系

チートで



異世界を自由に

生きていきます

Author: tera

Illustration: 三登いつき

ゴレオ

ゴーレム。
トウジのサモンモンスター。
仲間想いで優しい性格。

キング

スライムの王。
トウジのサモンモンスター。
バトルジャンキーの気質あり。

コレクト

コレクションピーク。
トウジのサモンモンスター。
優れたサポート能力を持つ。

マイヤー・アルバート

行商人の少女。19歳。
損得勘定で動く
生粋の商人タイプ。
世話焼きな一面もある。

トウジ(秋野冬至)

本編の主人公。29歳。
元フリーターで異世界召喚に
巻き込まれる。
ネーミングセンスが適当。

ポチ

コボルト。
トウジのサモンモンスター。
毛並みが良くコボルト界では
イケメン。

登場人物紹介

MAIN CHARACTERS

第一章 勇者召喚に巻き込まれたけど

俺の名前は秋野冬至^{あきのとうじ}。二十九歳独身のフリーターである。

そろそろ三十代なのだが、まともな人生はもう諦めた^{あきら}。バイトを掛け持ちして、空いた時間はネトゲに費やす^つ。

もうここまでくれば遊んで楽しんで生きていけば良いや、なんて思っていた矢先のことだ——単刀直入に言うが、勇者召喚に巻き込まれた。

事の発端は、バイト帰りにコンビニに立ち寄ろうと歩いていた時である。うざったい高校生ハレムの隣を通ったら足元に謎の魔法陣^{まほうじん}。

光に包まれて、あっと気づいたらそのまま見知らぬ場所にいた。

王冠を頭に乗せたおっさんが「おお勇者よ」だつてさ……マジかよ。

人生諦めたやつが勇者召喚されるだなんて、とんでもないなと思っていると、また新たな事実が判明する。どうやら俺は勇者ではないらしい。

あくまで俺は、巻き込まれただけの一般人だったのだ。

その証拠に、一緒に召喚された高校生ハーレムが勇者、賢者、剣聖、聖女っていかにもなスキルを持っているのに対して、俺だけ何も持たず、ステータスもチート補正なしで、異世界の極々平均だったのである。

例えば、各種ステータスの平均が100だとすると、勇者はオール1000で、珍しい雷魔法のスキルを覚えていた。

賢者は、MP（魔力量）とINT（知力）が勇者の二倍で、全ての属性魔法スキルを扱える。

剣聖は魔法スキルを覚えませんが、代わりにHP（体力）、VIT（耐久力）、STR（力）、そういう近接向けの数値が勇者を超える。

残った聖女は、なんかすごい回復魔法とか、あらゆる状態を治療する癒しの魔法を使えるとのこと。

うーん、みんなチート過ぎて、俺の立つ瀬がないな……。

ハーレムの主であるイケメン高校生くんからは、なんだか哀れみの籠った視線をもらい、その周りにいる美少女達からはクスクスと嘲笑された。

結論。日本での人生もある意味終わっていたけど、異世界に來ても終わっていた。

仰々しい勇者召喚の魔法陣で呼び出されても、俺の物語はなんら始まらなかったのである。

右も左もわからない状況で、いったいどうすりゃいいんだと頭を抱えた。

異世界で使える現実の知識とか持ってたらまだチャンスはあったのかもしれない。でもあいにく、

ゲームばかりやってたフリーターの俺には、何の知識もないのである。

そうしてあたふたしている内に、俺は王城を追い出された。

王様曰く『巻き込んでしまってますまないが、今は魔王軍との戦乱の時で余剰の人材を抱える余裕はない。一時金を用意するから街で暮らすと良い』とのこと。

要するに、お金をやるから出てってくれってことだ。

まあでも、こういった勇者召喚を扱った物語では、そのまま奴隷のように犠牲を強いられ、強制的に戦わされる話もある。だから下手に拘束されるより、結果的に自由を得たというのは、ラッキーだったのかもしれない。

デップリと肥えまくった王様から、戦乱の時と言われても信用できないしな……と、そう自分に言い聞かせて、俺はもらった金貨五枚をポケットに王都の城下町へと向かった。

まるでマンガやゲームやラノベの世界みたいな、中世ヨーロッパ風の街並みを見ながら歩く。

下手に拘束されるよりは良かったと強がってはみたものの、人生終わってるフリーターが今更異世界でどうやって過ごせと……。

物価も何もわからない状況で、とりあえず果物屋のおじさんにリングみたいな果物の値段でも聞いてみようと思った時、不意に視界に何かが映り込んだ。

【リンゴ】 価格…100ケテル

甘酸っぱくて美味^{おい}しい果実

HP 30回復

「うわっ!？」

「どうした兄ちゃん。何もないところでいきなりすっ転んで！」

「あ、いや、なんでもないです」

いきなり視界に変なものが映り込んだから、びっくりした。

もう一度リンゴを持って確認するのだが……はて、ケテル？

この言葉には少し見覚えがあった。俺がやっていたネットゲの通貨単位である。

「大丈夫なら良いんだけど……っておい！ せつかくの商品を汚してんじゃねえ！ 買い取っても

らうからな！ リンゴ一つで100ケテル！」

「す、すいません！ 買い取ります！」

「まったくもう……！ しかたなんだその服？ 見たことない服だな！」

うっかり落としてしまったのは俺なので素直に謝ってリンゴを買い取ることにした。

そのリンゴを齧^{かじ}りながら、たった今起きたことを考える。

いきなり目の前に半透明の仮想画面のようなものが出現したのだが、俺はまさか鑑定スキルを

持っているのだろうか。

【名前】 トウジ・アキノ

【年齢】 29

【レベル】 1

【HP】 100

【MP】 100

【STR】 90

【DEX】 90

【VIT】 100

【INT】 90

【AGI】 80

【スキル】

だがご覧の通り、ステータスと念じて内容を確認してみても、スキルは無しだ。

この平凡なステータスと空白のスキル欄^{らん}が、巻き込まれたただの一般人の証明である。

勇者達は固有スキルとして【勇者】とか【賢者】とか、相応のものを持っていた。ずるい。

「うーん、隠しスキルのな立ち位置か……？」

さっきのことを適当に分析して、次は目の前にあった武器屋の乱雑に並べられたセール中の武器を見つめながら鑑定と念じてみた……が、何も起きなかった。

なんなんだよ、なんなんですか！ いい加減にしろよ、もう！

やはり鑑定なんてスキルは持っていないみたいだ。少しだけ期待してしまった分、ガッカリ感がすごい。だけど、そうなることさっきの出来事が証明できないよな。

もう一度チャレンジしてみようってことで、次は武器の一本を手にとって、鑑定と念じてみることにした。俺の使い方が間違ってたのかもしれないからな。

【長剣】価格…8000ケテル

必要レベル…0

攻撃力…10

UG回数…5

特殊強化…レベル30より開放

限界の槌…2

すると目の前に、リンゴの時と同じような画面がブウンと表示される。

「こらー！ 何やってんだ！ 危ねえだろ！」

思わず長剣を手からポロリと落としてしまって、武器屋の人に怒鳴られたのだが、ぶっちゃけそれどころじゃなかった。

……必要レベルとか、攻撃力とか、さらにUG（アップグレード）回数と特殊強化に限界の槌まで。

画面に表示された内容が、廃人と呼ばれるほどやり込んでいた、とあるネットゲで表示されるものとまったく同じだったからである。

まさか、これが俺のチートスキルみたいなもんか？

いや、スキル欄は相変わらず空欄のままなのだから、スキルでは無いか。

単純にこの世界では、最初から全部そういう風に表示されるのかもしれない。

だが、もしこの世界が俺のよく知るネットゲの世界と同じならば、ひよつとすればなんとかなるかもしれないと思った。

廃人だからネットゲの知識は凄まじいぞ。むしろそれしか俺にはないぞ。

「迂闊に扱うなよ兄ちゃん！ 怪我したらどうすんだ！」

「す、すいません！ 武器は買い取りますので！」

考え込んでいると目の前で再度怒られてしまったので、すぐさまペコペコと謝る。

「いや、別に買い取らなくてもいいんだけど……こっちが悪いみたいだろ。ただうちの店で怪我人

なんか出ちや商売に影響するんだよ」

「すいません、ボーツとしてました」

「次から気をつけるよ。しかしなんだその服？ 見たことない服だな！」

俺のジャージをジロジロと見る武器屋の人。

やはりジャージ姿は目立つのか……もらったお金で服を買って着替えるか……。

「すいません、では失礼します」

もう一度頭を下げて武器屋を後にした俺は、ジャージを二束三文で売り払い、異世界の一般的な服へと着替えた。

それからすっかり街に溶け込みつつ、謎の仮想画面について情報収集したのだが、それでわかったことがある。

まず、この世界は俺のプレイしていたネトゲの世界ではない。

だが、どうやら俺だけネトゲ内のゲームシステムを一部使用できるということだ。

本来であれば鑑定スキルを持つていないと、装備の名称、必要レベルなどのステータスを見ることはできないのだが、俺はアイテムにカーソルを合わせるように、手を触れれば見ることができる。擬似的な鑑定機能だな。情報量も多い。

次にインベントリ。これは、アイテムボックスというレアスキルに似たものだった。

違うところを挙げるとすれば、アイテムボックスは大きな部屋のような空間であり、俺のインベ

ントリはアイテムスロットというマスで管理する。

装備、消費、その他など、アイテムがカテゴリ分けされていて、同じ種類の物だと認識されればまとめて保持することができるため、アイテムボックスよりも桁外れな収納量だった。

例えばリングをアイテムボックスいっぱいに買ったとする。俺のインベントリならそのリングは一つのマスを使用し個数表示される。

持っているお金も、インベントリに入れると合計金額が表示されるので、いちいち貨幣かへいの枚数を数えなくとも良い便利さ。最高じゃないか。

その他にも、HPが回復すると書かれていたリングなどは、食べなくても手で持って使用すると念じるだけで、効果を得ることができる。

だがその場合は、空腹が満たされることはない。

ここで気になるのが、死んだらゲームの時のように近場の街で復活するのかつて所なんだけど……課金アイテム用のポイントショップとか、ログイン、ログアウト用のシステムメニューやオプシオン機能とか、そういったものは使用できなかったので恐らく無いと判断した。

検証しようとも思わんけどな、怖すぎる。

とにかく、情報を閲覧えらんできる鑑定能力と荷物の持ち運びに困らなくなる能力をデフォルトで持っているという状況は頼もしかった。

日本では人生終わってて、異世界に来ても引き続き終わったと思っていたが、これは始まったと

いつでも過言ではない。

食べずともHPやMPを即回復できたりとかはぶっちゃけどうでもよくて、鑑定能力とインベントリの二つがあれば十分なのである。それで行商人とか運び屋とかやって日銭を稼げれば、とりあえずは生きて行けそうな気がしたのだ。

「とりあえず、何とかやっていくしかないな」

一番安い宿屋を借りて、狭い部屋のベッドに腰掛けながらそう独りごちる。

もうどうしようも無いと思っていただけに、なんとかかなりそうでホッとした。



異世界に召喚されてから、はや三日。

俺は王都からそう遠くない場所にある森へとやって来た。

「魔物の回収、頼むぜトウジ」

「はい」

Dランク冒険者であるブレイブルさんの指示通りに、狩られた狼の魔物をインベントリへ入れていく。冒険者の荷物持ち、これが最近の俺の仕事だ。

「まったく……アイテムボックスなんていうレアスキルを持つてるのに良いのか？ こんなに格安

で荷物持ちを引き受けてくれて？」

「大丈夫ですよー」

ブレイブルさんのそんな言葉に、ニコニコしながら返事をしておく。

聞けば、アイテムボックス持ちの人は冒険者の荷物持ちなんか引き受けないそうだ。

荷物を一人で大量に持てる特性上、商人の行商に同行したり、専属荷物持ちとして高給で雇われることが多いらしい。

「商売ができる程、良い頭はしてませんからね」

「そうだな！ 格安で冒険者の荷物持ちを引き受けるくらいだからな！ ガッハッハ！」

ブレイブルとパーティーを組んでいる斧持ち戦士のグラインが豪快に笑う。

やや突き刺さる言葉だが、別にどうってことない。

格安で引き受けても、商人の荷物持ちをするよりさらに稼げるのだからな！

「そうですね、ハハハ」

適当に笑って済ませておく。

さて、何故俺が商人の荷物持ちをせずに、こうして野暮ったい冒険者連中の荷物持ちを格安で引き受けているかというと、それは何故か俺だけゲームシステムを使えることによる。

当初の予定は、鑑定とアイテムボックス持ちですって偽って、商人の真似事かそれこそ商人の荷物持ちをする予定だった。

だが、興味本位で冒険者ギルドに冒険者として登録して、いざ魔物のいる森へ足を運び……とんでもないことが発覚したのだ。

とんでもないこと——それはドロップアイテムの存在である。

ゲームって、モンスターとか敵を倒すとお金やアイテムをゲットできるだろう？

俺が森に入った時、冒険者が魔物を倒して通った道に、そのドロップアイテムが散らばりまくっていたのである。

魔物を倒した冒険者は、死体の側に散らばったドロップアイテムを無視しているので、俺にしか見えないっぽい。

こいつは本当にとんでもないチートだと思った。戦慄した。

商人の真似事とか、商人の荷物持ちとか、そんなことをするより冒険者の狩りに同行して、倒してもらった魔物のドロップアイテムを根こそぎかき集める方がお手軽なのである。

Dランク冒険者である彼らの獲物は弱い魔物だ。

故にドロップアイテムは素材一種類とわずかなお金ののだが、塵も積もれば山となるという言葉があるように、俺のインベントリに表示されているケテル残高は増え続けた。

うん、これほど楽でいい仕事はない。

格安で引き受けることで、戦闘には参加しないと明言してるけど、ちゃんと守ってもらえるし、ネトゲで寄生する「姫プレイ」みたいな状況だ。

「よし、今日はその場で解体しなくてもいいし、荷物も持たなくて済むから、もっともつと狩りを続けるか！」

「おっけー！ いつもの三倍は頑張るぜ！」

そう意気込んで森を歩くプレイブル達。

いいですとも、いいですとも、そうやって調子を上げてくれれば俺の稼ぎも増える。

ドロップアイテムは俺以外には見えないのだが、一度インベントリに入れてから出したら、他の人も認識できるようになる。

狼の魔物からドロップする毛皮は品質が均一で、それを商人のところに売りに行つて、ある程度の信用も得たいところである。

素材をくすねてたんじゃないかと、同行している冒険者が考えたりしたらやばい。あまり派手は行動はせずに、できれば別の街へ移動してから売った方がいいな。

「おいトウジ！ あんまり数が多いからって、ちよろまかすなよ！」

ドロップアイテムは時間経過で消えてしまうので、急いで回収していると、先を進んでいたグラインが俺の方を振り返ってそう叫んだ。

「安心してください。メモってます」

同行する冒険者には、しっかり筋を通しておく。人生どこで恨みを買うかわからないから、極力揉め事は避けなければいけない。

この荷物持ちは冒険者ギルドを通さずに個人でやってるもんだからな、格安でやる分、黙ってくださいねってことだ。



冒険者に寄生行為を続けて一週間。ドロップするお金、ドロップケテルもかなり貯まった。一日の稼ぎがだいたい1万〜2万ケテル。冒険者が頑張ってくれたら3万を超える。

王城側が俺にくれた手切れ金が、金貨五枚Ⅱ5万ケテルだったことを考えると、なんとも言えない気持ちになった。手切れ金にしては本当に少なすぎた。

まったく、5万で何をしろというんだ。一月分の家賃にすらならん。

ちなみに貨幣とケテルの関係は、こんな感じだ。

- ・銅貨一枚……100ケテル。
- ・銀貨一枚……1000ケテル。
- ・金貨一枚……1万ケテル。

その上に白金貨と呼ばれる100万ケテル相当の価値のものもあるらしい。

銅貨より下はなく、故に、安くても銅貨一枚単位での取引となり、銅貨一枚以下の価値のものは、100ケテルの量がまとめ売りとなる。

「トウジさん、今日はよろしくお願いします」

待ち合わせ場所に行っている冒険者ギルドの向かいの食堂にいと一人の男性に声をかけられた。

口調が丁寧なこの冒険者は、Cランクパーティーの《新緑の風》のリーダー、アレスだ。

冒険者について説明しておくが、魔物を討伐したり、素材を集めたり、要人を護衛したりする、まさに何でも屋さんだ。

ランクはF〜Sまであって、Cランクからはパーティーに名前をつけることが許されるらしい。

この間までは、Dランク帯を対象としていたのだが、今回はCランクの冒険者についていくことにした。

同行する場所の危険度を考慮すると、Dランクくらいが一番手頃である。

だが、割と森の奥まで遠征するCランクについていくと、そこそこ強めの魔物が出て来て、そいつが強化のスクロールをドロップするのだ。

強化のスクロールとは、レアドロップの一種である。装備のUG回数を消費して、武器そのものの攻撃力や魔力、ステータスを上昇させられる書物だ。

なぜ強化のスクロールが必要なのか。

俺がスキルを一切持たず、平凡以下なステータスで、強くなるにはそれしかないからである。

「よろしく願います。お伝えしたとおり、俺は戦闘には参加できませんので……」

「はい。有事の際は僕達が必ず護衛いたします」

「ありがとうございます」

「運んで欲しい荷物は正門の方にメンバーが準備してますので、よろしく願います」

「わかりました」

今回は朝から出向き、日を跨いで帰ってくるそうなので、荷物の量もやや多め。

一泊二日の行程が面倒だとは思ったが、レアドロップを得るためなら仕方ない。

道中は順調に進み、森の少し開けた場所ですべて野宿となった。

《新緑の風》とはある魔物の討伐依頼を受けているので、むやみな戦闘は避けており、ドロップアイテムの収集率は余りよくない。

だがそのとある魔物とやらが、俺の予想ではボスクラスである。

これはレアドロップが期待できそうなので、その辺は我慢だな。

「トウジさん、ここにテントをお願いします」

「はい」

パーティーリーダーのアレスに従ってインベントリからテントを出す。

「いやあ、今まで道中で倒した魔物は放置することが多かったんですが、トウジさんがいてくれる

おかげで無駄にせずに済みますよ。移動もかなり早くできましたし」

「いえいえ、多めに報酬ほらばらをもらってますから」

通し二日間ってことで、いつもの三倍の額をもらっているのだから文句はない。

「そうよねー、テントじゃなくて野宿の日もあるから、私らの専属になって欲しいくらいよ」

アレスの後ろから顔を出してそう言うのは、エリーサ。

火属性の魔法スキルを持つ、パーティーの火力担当である。くるくると癖くせのある赤毛が特徴の美人さんだ。

「ダメだよエリーサ。荷物持ちさんはみんなの荷物持ちさんなんだから……っていうかテント張るの手伝ってよー」

俺がインベントリから出したテントを張っているのは、弓使いのフリー。

スレンダーな体型で、木々の上を楽々飛び渡る身軽さを持つ。

索敵さくどくスキルを持っていて、弓の腕もかなり良い。

「えーでもこの際いいんじゃないの？」

「ハハハ、足手まといになりますよ」

「そうなんても、戦闘には参加しなくて良いわよ？ 一緒に行動するだけでかなりの貢献になるし」

「こらエリーサ。トウジさんが困ってるだろう？」

アレスに窘められたエリーサは「はいはい、でも割と本気だからね?」と言いながらテントの設営を手伝い始める。

専属かあ……彼らのようなパーティーならば楽しそうだけど、やっぱなしだな。

せっかく便利系チートみたいな能力を手に入れたんだから、お金を貯めたら旅をしてみたい。同行する冒険者から情報を得たのだが、今この国は、魔王の国と不可侵条約を結んでいるらしい。過去に大きな戦があったそうだが、最近は平和な時が続いているんだとか。

だとしたら、王様は何故勇者を召喚したんだろうな、とも思っただが……。

それも国民に知れ渡っているようで、魔王の国と一番近いこの国が独断で勇者を呼んだらしい。神託が降ったとか、戦いの準備をしているらしいとの報告があったとか、そんな言い訳をしているようだが、他の国のお偉いさん方は、周りを出し抜くための戦力確保なんじゃないか、と言っているそうだ。

それを知った瞬間、追い出されてむしろよかったと心の底から思った。

こうして楽にお金も稼げることだしな。

ちなみにこの国の名前はデブリ。でつぷりと太ったケチ王様に似合う名前である。

ともかく、世界が平和だとわかったら、街に籠るよりもこの異世界を見て回りたいと思った。

だからこうしてせっせとお金を稼いでいる訳である。今はレベル1だが、レベルを上げて武器や装備も強化して、強くなったらいろんな国を旅したい。

「薪を拾ってきた。近場に魔物がちよくちよくいるから、警戒しておいたほうがいい」

テント設営を終えたところで、《新緑の風》最後のメンバー、盾戦士のクラソンが枝を抱えて森から戻ってくる。どうやら薪拾いをしつつ、同時に周囲の確認をしてくれたようだ。

アレスが両手剣、クラソンが盾、フリーが弓でエリーサが魔法。

なかなかバランスが取れたパーティーだよな。

「ありがとうクラソン。なら、夜の見張りは二人ずつ交代でやろうか」

「見張りか……」

俺にこなせるだろうか。そう思っていると、アレスが言う。

「トウジさんは寝てて良いですよ!」

「え? いやいや、見張りくらいは」

「有事の際は僕らが起きて対応しなきゃならないですし、普通に寝てても大丈夫です」
確かにそうだった。魔物が近寄って来ても俺は碌に追いつくこともできないからな。

ここは素直に言うことを聞いておくか。

「わかりました」

「そうそう、寝てて良いわよ? 今日の道中割と疲れたでしょ? レベル1なんだからあんまり無理はしないことね」

「は、はあ……どうもです」

うーん、どうやら道中俺に合わせて歩いてくれていたみたいだな。

思えばいつも以上の距離を歩いたのだが、そこまでしんどいとは思わなかった。体力がついたのかとも思っていたが、そうではなかったのである。

「俺に合わせてゆっくり歩いてくれたんですね。すいません」

「気にしないでくださいトウジさん、荷物を持っていたいて、僕達の方が楽をさせてもらってますから」

楽させてもらってるのはこっちなんだけどなあ……。

すごく良い人達なので、俺も頑張って役目をこなそうと思った。

それから夕食も済ませて寝る時間になったのだが、寝ることは叶わなかった。夜、集団で襲いかかってきた狼のせいである。

狼達を《新緑の風》が蹴散らして、その素材を回収していると気が付けば夜が明けていた。

「夜襲はグレイウルフの群れでした。一応縄張りから少し離れてテントを張ったんですが、まさかあんな大勢で襲ってくるとは……危険な目に遭わせてすいません、トウジさん」

朝日が昇り、再び森の奥へと進みながら、アレスが俺にペコペコと謝る。

「いえいえ、大丈夫です」

寝ることはできなかったが、その分ドロップアイテムをたんまり稼げたからな！

そうとは知らないアレス達は、徹夜で素材集めをさせたことを謝罪する。なんだかこう謝られると心が痛くなってくるものだ。

冒険者って、もっと自由奔放で荒くれているイメージがあったからね。

そういう奴らももちろんいるから、アレス達がすごく良い人だつてことがよくわかる。

「これは情報通り……やっぱりあいつがいるようね」

エリーサが杖を構えて歩きながら言った。

あいつとは、今回の討伐対象であるグレイトウルフ。

彼女が言うには、群れを率いるグレイウルフの一頭が進化して、グレイトウルフになったことで縄張りが広くなった可能性があるとのこと。

事前の情報により、縄張りから少し離れた位置にテントを設置したはずなのに、こうして襲われたのはそのせいではないか、ということだった。

この世界の魔物は、レベルが一定を超えると強い魔物に進化するそうだ。

「それは危険な魔物ですかね？」

「徹夜だが問題ない。俺の盾でお前を守ってやる」

俺の問いかけにそう豪語するクラソン。筋骨隆々の腕が頼もしい。

「護衛はきっちりやりますから、安心してくださいトウジさん」

「わかりました」

《新緑の風》のメンバーはすごく良い人達で安心できるのだが、やっぱり俺も戦えるように力を持つべきだと思った。

もし同行した冒険者に森の奥深くで置き去りにされたら一巻の終わりだ。

「みんな、ストップ！」

木の上を移動しながら、索敵していたフリーが唐突に叫ぶ。

「正面！ グレイウルフの群れ！ 数は……僕の索敵スキルじゃ把握しきれないかも！」

どうやら敵襲のようだ。それもフリーの索敵では把握しきれない程の規模。

大丈夫だろうか……？

「方向は正面ね？ 距離は？」

「五秒後、五十メートル付近まで接近するよ！」

「了解！」

エリーサが正面に立ち、そして杖を構えるとブツブツと言葉を紡ぐ。

詠唱という奴だ。彼女の言葉と同時に、杖の周りに光る文字が浮かび上がる。

「火炎の槍！」

ボロボボと何もないところからいくつもの炎が生まれた。

その炎は槍の形になり正面へかつ飛んで行く。

森の木々を焦がし、穿ち、放った方向からは狼の悲鳴が聞こえてくる。

「ふう、これである程度は間引けたわ——ね——」

「——グオン!!」

「グレイトウルフッ！」

ふうと汗を拭ったエリーサの右の茂みから、巨大な狼が牙を剥いて出現する。

大きく顎を開いてエリーサに噛みつこうとするが、直前にクラソンが動く。

持っていた鋼鉄の盾を用いて、グレイトウルフの顎をなんとか止めた。

「気を抜くな、エリーサ」

「クラソン助かった！」

「僕の索敵スキルにも引っかけられないなんて、こいつ隠蔽のスキル持ちかも！」

フリーがそう言いながら弓を弾く。

それを視認したグレイトウルフはすぐに飛びのいて再び茂みに姿をくらませた。

「チッ、引くのが早いな……特殊個体っぽい動きだ！」

アレスも両手剣を持ち、正面から特攻を仕掛けてくるグレイウルフ達を捌きながら言う。

特殊個体ってことは、なんとなくドロップアイテムにかなり良いのが期待できそうなのだが、それ以上に危険な雰囲気を感じた。

「みんな四方を警戒して固まれ！ フリーはもつと高い木の上に！」

アレスの声に合わせて、みんながそれぞれ動いた。

フリー以外の三人が、俺を中心に四方を警戒しグレイウルフを蹴散らして行く。

「トウジさんは、そのまま頭を防御してしゃがんでいてください！」

「は、はひ」

言われた通りにした。この状況が思ったよりも怖くて、言葉を囁む。

「特にクラソンからは離れないように！」

「必ず後ろにいろ」

「わ、わかりました」

「さあ、来なさい大きな狼ちゃん？ 私の魔法で焼き焦がしてあげるんだから」

グレイウルフのドロップアイテムを消える前に拾いに行きたいのだが、そんなことも言ってもらえない。

彼らが警戒するほどの魔物だから、俺もしっかり自衛に努めなければ……アイテムボックスから最初に買った長剣を一応取り出しておく。

「無理しないでね！ トウジ！」

「い、一応念のためです」

エリーサとそんな会話をしていると、フリーの声が響く。

「草が動いた！ みんなクラソンの正面だよ！」

「ありがとうフリー！ 位置がわかってれば簡単だ！ 迎え撃つぞクラソン！」

「了解した」

アレスとクラソンがそれぞれ剣と盾を構えたところで、グレイトウルフがフリーの言った方向から出現。今度は鋭い爪での薙ぎ払い。

「ふん」

ガギンと音がして、火花が散る。

鋼鉄の盾を思いっきり引っ掻いたのに欠けることもない、とんでもなく強靱な爪だ。

グレイトウルフはヒット&アウェイを繰り返して戦うつもりらしく、一度攻撃したらすぐに茂みに逃れようとする。

「させん、シールドバッシュ」

そこへ、クラソンが盾で体当たりした。

ギューンと加速して逃れようとしたグレイトウルフの後ろ足に激突する。

「——!?」

グレイトウルフの動きが一瞬止まった。

盾のスキルか。シールドバッシュは、どの世界でも相手の動きを止める効果を持つっぽいな。

「チャンスだ！ 僕がスキルで切り込む！ エリーサ！」

動きを止められたグレイトウルフに、何やら風のようなものを纏ったアレスがすごい速さで切り込んでいく。

「わかってるわよ！ 私は周りの雑魚ざこをなんとかするわね！ 火炎の雨！」

アレスの一撃が致命傷となり、グレイトウルフは絶命する。

その間に、エリーサは広範囲にわたる火属性魔法で周りの雑魚狼達を焼き焦がした。

索敵役のフリーの指示から、ここまでの動き……実に見事な連携だった。

明らかに特殊個体で強そうなグレイトウルフなのに、一瞬だ。

首筋から血を流し倒れるグレイトウルフ。

その巨体の周りに、俺だけに見えるドロップアイテムがたくさん散らばっている。群れを率いていたボスっぽい魔物だから、ドロップの量もかなりあったようだ。

強化のスクロールに加え、なんと小さなナイフとマントまで落ちていた。

こっそり確認すると【大狼の牙短剣たいろうのきばたんけん】と【隠狼のマントいんろう】と書かれていた。

レア装備っぽいドロップだ！ やったでおい！

さらにケテルを確認すると……なんと一頭で2000ケテル。

グレイウルフが一頭200ケテル程度なのを考えると十倍だ。うまうま。

「ふう……討伐完了ね！」

今度こそ、と息を吐くエリーサ。

倒れたグレイトウルフを調べながら、アレスが喜んだ表情を作る。

「気配を消せる特殊個体だから、恐らくハイドウルフ系の進化をしたんだね。うん、これだと討伐

報酬にも色がつくし、そのまま持って帰れば特殊な装備が作れるかもしれないから、今回の依頼は
かなり得したよ」

「この大きさなら、みんなの分の装備も賄まかなえそうだけど……どうするアレス、売っちゃう？」

「いや、隠密効果が期待できそうだから、これは装備に変えたほうがいいと思うよ」

「賛成かな？ 僕達は四人の少数パーティーだから、これがあるとかかなり違ってくる」

アレスの言葉にフリーも同意し、クラソンもウンウンと頷いていた。

「それもそうね」

最後にエリーサも同意して、グレイトウルフの毛皮はみんなの装備になることが決定したようだ。

「トウジさんも、それでいいですか？」

「へ？」

アレスがいきなり俺に話を振ってきたもんだから驚いた。

まさかとは言わんが、グレイトウルフの毛皮を使った装備をくれるってことかな？

「いやいやいやいや、大丈夫です。俺に回す箇所は売ってください。報酬も多めです」

慌てて断っておく。俺はただ見てただけだしな。

そもそも、ドロップアイテムを色々ゲットしてるんだし……なんかそこまで至れり尽くせりだと、
バチが当たりそうな気がした。地味に昨日の夕飯だって面倒見てもらったしな。

「トウジさん……」